

小さなハンディが

あつたからーん

川口 有理



丁度その頃のことです。それは、みるみるうちに広がり、一週間程度で顔全体火傷やけどをしたように赤剥むきけの状態になってしまいました。

娘が産声をあげたのは、梅雨つゆの晴れ間、たつた一日だけ青空の広がった朝でした。二四七〇グラムと痩せつぱちだつたことが嘘のように、娘はグイグイ母乳を飲んで大きくなり、生後半年目には標準体重に追いついてしました。

娘の右の頬に十円玉位の赤い湿疹ができたのは牛乳のアレルギーで食事療法をしていった経験か

特集 <アレルギーとつきあう> ~~~~~

ら、それが恐らくアレルギー性のものであることは容易に想像がついたのですが、そうと分かったら生活そのものの変革を迫られるだろうという予感から、受診をためらったまま幾日かが過ぎて行きました。

そんなある日、軟らかいものなら食べられるようになつた娘へとお土産に頂いたカステラを、ひと口娘に食べさせてみたところ、娘は急に泣きわめきながら咳き込み、みるみる顔が膨れ上がり、ぐつたりとなつてしまつたのです。予感的中といふ思いを頭の片隅に感じながら、しぶしぶ受診したアレルギーの専門外来で、ギョッとするような数値の検査結果を見せられ、諦めの悪い私も、それでやっと観念したのです。娘のアレルゲンは、卵、牛乳、大豆、小麦、米、豚、じやが芋、とうもろこし、牛、鶏等……とのことで、その日から、それまで考えもしなかつた（？）生活が始まりました。食物にアレルギーのある子どもは成長に従

い、吸入性のアレルゲン（ダニやハウスダストなど）にも反応するようになるということで、毎日の掃除や布団干しも手抜きができなくなり（してるけど）、無精者の私にはこれが一番の難関でした。又、冷え性の私には勇気のいることでした。が、買ったばかりのカーペットも板の間から外しました。

食物に対しても、検査の結果を参考に、少しづつ色々な食品を試しながら、症状を誘発する食品を捲し、それ以外の食品でバランスを取つてメニューを組むようにしました（口で言うのは簡単なんだけどね……）。

さて、そのような生活を続けて一年程たつと、娘の湿疹は徐々に良くなり、度々起こしていたショック症状や喘息発作も半年単位で減つていきました。もちろん発育も順調です。

ところで、卵、牛乳、大豆の三種は日本人の三大アレルゲンとなっていますが、これらを取らな

いよう意識してみると、今の日本人の食生活がいかにこの限られた食品に依存しているか、とくに気付かされます。市販の加工食品で、この三つの食品が使われていないものを搜すのは至難の技です。学校給食のメニューなどは良い例で、これららの食品のオノパレードです。卵や牛乳、大豆製品そのものを食べなくても、一日に無意識に摂取されるこれらの量は相当なものなのです。

又、コストを抑えるために、身体からだにとっての安全性は二の次にされている食品が殆んどです。ある時娘は、近所の子どもに貰つたフルーツキャンディーを口に含んだ途端、呼吸困難と意識不明に陥りました。キャンディーに入っていた黄色四号という着色料が原因のアナフィラキシー・ショックでした。この様に、抗原性の高い危険な添加物が、子どもの好む菓子に平然と使用されている現状を、多くの人は知りません。その上、娘のような体質を持つ子どもは年々増えているのです。ま

だ口もきけない小さな娘が命をかけて私にそれを教えてくれたのだと思うと、ひとりでも多くの人たちにそれを伝えなくてはと、気がはやります。

娘は今、二歳六ヶ月。昨年から、私の看護教員としての仕事の間はおはあちゃんと過ごしていましたが、木枯しの中、毎日めいっぱい散歩や外遊びをさせてもらうせいか、薄着で風邪もひかず、アレルギー症状さえ抜かせば、むしろ他の子どもよりも丈夫に育っています。

娘がこれから集団の中で過ごすようになった時、娘の抱える問題を周囲にどう理解して貰うか、又一步進んで自分たちの問題として考えて貰うにはどうしたらよいかが、今の私の課題です。

そのための土台作りとして一昨年、川口市に「ぱけつとの会」というアレルギー児の親の会を作り、ネットワーク作りを進めています。発足以来、全員参加の形で毎月発行されている「ぱけつと通信」は、情報交換の場として、又、ストレス

特集〈アレルギーとつきあう〉~~~~~

の掛け口としてアレルギー児を持つ親たちの心の支えとなっています。昨年暮れには、アレルギー用食品を手がける食品会社に特注（一番重症の児に合わせて皆が同じ物を注文）したアレルギー用のクリスマスブーツとケーキを囲んで、楽しいひとときを過ごしました。普段、友達と同じおやつが食べられず、クリスマスブーツやケーキなど夢のまた夢という食物アレルギーの子どもたちにとっては、大変心はずむ貴重な体験となりました。

食事や生活の面で制約されることの多い娘を、はじめは不憫に思いました。でも、この小さなハンディが娘にとってむしろプラスになっているのでは、との頃感じじるのです。アレルギーがあつたからこそ出合うことができた沢山の仲間たちもそのひとつですが、娘自身が自分のハンディを通して、又別のハンディを持つ多くの人たちの存在に気付き、社会の中で人はお互いに弱い部分を補い合って生きているのだということに気付けたとしたら、これほど価値のある学びは他にないと思います。

私たち夫婦も、娘のアレルギーとつき合うことによって、今まで何気なくくり返して來たこと、例えば食物を食べることや眠ること、働くこと、物を買うこと、捨てること、人と交わること、そういったひとつひとつの方を問い合わせ直さなければならぬ場面が多く、その中で沢山のことを学び、少し成長したようです。

まだまだ子育ての経験も浅く、楽しさも、苦勞も、本当の所は分かつていない私たちですが、でもこの先どんなに大変なことがあっても、きっと大丈夫、と言えるくらいの自信はついて、そろそろ二人目をと、考えている今日この頃です。

（ぼけっとの会）

人たちは存在に気付き、社会の中で人はお互いに